

四象八牛

理塘をゆく

2002年8月 四川省甘孜藏族自治州理塘県



成都から康定、そして理塘へ

2002年夏、西安から始まった旅、約1ヶ月の時間を経て成都へとたどり着いた。もちろん成都まで来たのは、今回の旅の主要な目的の一つである藏族の賽馬節を観るために、甘孜州理塘県へ行くためだ。

成都で数日間休息したあと、まずは甘孜州の州府である康定へ向かうことにした。成都交通飯店に宿泊していたので、隣の新南門バスターミナルへチケットを買いに行った。チケットはあっさりを買えた。しかし乗るバスの割当てのために登録をしなければならないとのこと。すぐ横にある登録台に行く。サービス員にチケットを見せると「どこから来た？」と聞かれた。私はとっさに中国語で「蘇州からだよ」と答えた。実は、外国人が甘孜州方面のバスに乗るときには高い保険料を払わなければならないのだ。そのことを知っていたので、中国人のふりをしたのであった。これは見事に成功、出発は次の日の午前10時だ。

次の日、バスに乗り込む。なかなか綺麗なバスだ。席に座っていると、隣の客が来た。人民解放軍の軍人のようだ。「ん？ 何か変な臭いがする」なんとその軍人は腋臭だったのだ。

それはさておき、バスは出発する。成都から雅安までは高速道路を疾走、快適だ。その後、バスはどんどん高度を上げていく。甘孜州へは標高3,437mの二郎山を越えなければならない。しかし、今は標高2,200mのところにトンネルが完成し、峠越えはしなくてもよい。ところが、このトンネルがまた曲者なのだ。施工が不十分なまま開通したため、補修工事が延々と続いている。結局通行止めが解除されるまで、トンネル手前の小さな街で3時間待たされたのだ。その後、瀘定から康定までの道も工事中、康定に到着したのは夜遅く、22時半だった。

さて、理塘賽馬節が開催されるまでにはまだ日にちがある。高地へ来たのは初めだ。高度順応のためにも康定で数日過ごす。チベット仏教寺院や、瀘定の海螺溝へも行った。

7月末、まもなく理塘賽馬節が開催される。朝早く、理塘行きのバスに乗り込む。同じバスに欧米人も数人乗り込んできた。バスは少し遅れて出発、新都橋、雅江を経てどんどん進んで行く。それにつれて標高もどんどん高くなってくる。山を削って造られた、くねくねと曲がった道が延々と続く。午後、尾根を越えると目の前に広大な草原が広がった。草原には白いテントが無数に張られている。理塘の街だ。

雨の中の宿探し

理塘へ到着した。さすがにお祭りが開催されるので人が多い。周辺の街から集まってきた藏族の人たちで溢れている。

さて、何はともあれ宿を探さなければならない。成都で貰ったガイドブックのコピーを元に安宿を探すが、すでに満室だという。欧米人と一緒にいくつか別の宿もあためてみるが、やはりダメだった。いつの間にか雨が降り出した。



▲理塘草原

重い荷物を担いで歩き回る。理塘は標高4,000mにある街だ。雨が降るとかなり寒くなる。さらに曇まで降り出した。もう一件、招待所に入り聞いてみる。「1ベッド50円で空きもある」という。ちょっと高いが仕方がない。「1週間程泊まりたい」というと「大丈夫」との答えが来た。宿が決まったので食事へ。食堂はたくさんあるのだが、あまりおいしくなさそう。招待所へ戻ると「賽馬節が始まったら泊められなくなる」と言われた。疲れていたのでは文句も言わず寝る事にした。雨に打たれたせい、ちょっと熱っぽい。風邪薬を飲んで寝てしまった。

次の日の朝、体の調子も元に戻ったようだ。また別の宿を探しに行く。バスターミナルまで戻ると、斜め向かいにチベット風の建物があった。「聖地大酒店」建物も新しい。とにかく聞いてみることにした。中に入ると漢族の兄ちゃんが出てきて、おかしな四川方言を使う。「空きがあるよ。1ベッド20元、ずっと泊まっても大丈夫」という。私にとっては願ったり叶ったりである。さっそく荷物も移動してきた。実はこの漢族の兄ちゃんは北京人で、仕事で理塘へ来て、ここに宿泊しているそうだ。宿の主は藏族。あとは数人の藏族のスタッフが働いている。皆優しく、家庭的だ。ということで、しばらくここで世話になることとなった。

チベット仏教寺院へ

賽馬節はあさってから開催される。この日はチベット寺院へ行くことにした。ここ理塘は、七世と十世ダライ・ラマの出身地でもある。



▲長青春科爾寺（理塘寺）

まずは丘の上に建つ長青春科爾寺へ向かう。寺の門前では、小坊主たちが遊んでいる。カメラを持った私を見つけると、駆け寄って来て、写真を撮れとせがむ。それから寺院内部を見て回りながら、さらに上へと登っていく。一番高い場所へたどりつく。眺めがとてもよい。近くに数人の若い僧侶たちが座っている。彼らもとても気さくで、話かけてきた。日本語のガイドブックを見せると真剣に見入っている。



▲チベット僧の宅内



▲酥油花



▲白塔公園にて

彼らに別れを告げ、下りていく。寺から出ると、一人の僧侶に「家の中を見ていかないか」と呼び止められた。せっかくなので、途中、出会った欧米人の夫婦も誘って、見せて貰う。僧侶の宅内には、たくさんの古いタンカが掛けられ、七世ダライ・ラマの足跡の石や、活仏の写真も飾られている。また別棟には色鮮やかな酥油花も置かれている。この僧侶はあまり漢語を話せない。それでもいろいろと説明してくれた。帰り際にこの僧侶がとある物をくれたのだが、ここにそれは何かを書けない。

賽馬節、はじまる

8月1日、待ちに待った賽馬節の開幕だ。今年は5年に一度の大祭で、7日間にわたって開催されるそう。街から2kmほど離れた草原には舞台が設置され、大きなスピーカーもたくさん並べられている。お決まりの開催挨拶が続くが、そんなものには耳が興味を示さない。



▲まずは走り初め

さあ、とうとう始まった。まずは無数の馬に跨った藏族の男たちが、ドドドッと地響きをあげて走り込んできた。すごい、圧巻だ。会場が一気に盛り上がる。でも今日、馬の出番はこれで終わり。その後は、近くの村から集まってきた藏族が、華やかな衣装を身につけて練り歩く。男も女も皆ここぞとばかりの盛装だ。会場には活仏も訪れている。チベットのお祭りの雰囲気があちらこちらで溢れているのだ。



▲華やかな衣装を身にまとう

次の日も次の日も、お祭りは続いていく。のんびりしているのか、間延びしてしまう。晴れたときは暖かいのだが、雨が降ると寒い。ときどき曇も降った。街から会場まではバスもあるのだが、人がいっぱいでは乗れない。ある日、歩いて会場へ向かっていると、車が一台停まった。「会場へ行くんだろ、乗れよ」と車に乗せてくれた。彼は藏族で、名はダーワンというそう。いろいろ話を聞くと、「草原に車がたくさん乗り入れるので、草原がダメになっている。来年は会場を移動するかもしれない」と言っている。確かに草原にはたくさんの車が乗り入れている。この人たちはお金持ちも多い。高級な四輪駆動車を乗り回しているのだ。確かに草原の所々に轍があり、土が露出しているところが多い。回復するには時間がかかるそう。ダーワンは「暇だったら、おれのテントに遊びにおいで」と言って去っていった。



▲活仏



▲盛装した藏族姑娘



▲藏戲



▲剣を構える藏族

賽馬節、日本語なら競馬祭と言うのだろう。しかし競馬と言っても馬の速さを競うだけではない。藏族の生活にとって馬は切り離せないものだから、どれだけ上手に馬を扱えるか、乗りこなせるかも競争になる。だから安定したギャロップ走行ができるかの競技もあるし、疾走する馬の背から身を投げ出して地面にある物を取る競技もある。ギャロップ走行競技の賞金はなんと1万円である。藏族の男性はここぞとばかりにその勇姿を見せつけるのだ。



▲精悍な藏族の男



▲民族舞踊を披露



▲馬に跨り勇ましく疾走

温泉へ

理塘へ来てから数日間、シャワーに入っていない。このあたりは水の便がよくないので、安い宿にはシャワーの設備がないのだ。髪も乾燥してバサバサになっているし「風呂に入りたいなあ」と思っていた。すると同じ部屋にいた中国人の女の子が「近くに温泉があるらしいよ」と教えてくれた。宿のサービス員に聞くと、温泉は街から数km離れた場所にあるという。さっそく行ってみることにした。

このあたりの温泉はどんなものかと想像していたが、やはり日本人が普通に想像する温泉とは違っていた。個室に大きめの浴槽があり、そこに湯をはる。ちなみにシャワーなどの設備はない。お湯が溜まるのを待ちわびる。やっとなかれるほどになった。「うあ～気持ちええ～」中国に来てからは湯船につかることはなかったので、この気持ちよさは格別だ。久々に髪を洗い、体を温める。「う～ん、天国天国」まさかここで湯船につかれるなんて思ってもいなかった。すっきりさっぱり、最高だった。

草原を散歩

宿泊している宿に、藏族の女の子がいる。彼女の名前は降央曲西。宿の主人の妹で、成都の大学に進学しているのだが、夏休みなので理塘へ戻ってきていた。彼女は面倒見がよく、宿泊客にもよくしてくれる。宿ではよく酥油茶を出してくれたし、彼女の家が草原に張ったテントや、彼女の家へも招待され、藏族の料理もごちそうしてもらった。

ある日、彼女と草原へ散歩に行った。話をしているうちに、彼女はこう言い出した「私はこの街にずっと居たくはない。何にもないから、大きな街へ出て働きたい」。やはりどこでも年頃の女の子は同じことを思っているのかな。確かにこの街は賽馬節が終わればまた静けさを取り戻す。若者にとっては寂しい街なのだろう。

青い空の下に広がる草原を、しばらく歩き続けた。私ももうすぐ理塘とはお別れである。

さよなら理塘

理塘に来て1週間。賽馬節も満喫したので、次の目的地である稻城へ向かうことにする。午後、バスに乗り込む前に降央曲西が見送りに来てくれた。宿の女将さん、変な四川話を話す北京人の兄ちゃん、ダーワン。たくさん優しい人たちと出会えた街、理塘。心温まるひとときを過ごすことができた。ありがとう。再見！